

「魅力ある授業づくり」への一歩

学生による授業評価と教員による授業自己評価

今回は2008年度春学期・秋学期の共通設問を用いた、学生による授業評価と、教員による授業自己評価に着目しました。図1および図2は、共通設問に対する全学生と全教員の平均ポイント(棒グラフ)、また学生と教員の評価ポイントの差(折れ線)を示しています。

図1の左よりの8つの設問は、授業の評価に関する直接的な設問ですが、「内容を理解できたか」「魅力的な授業であったか」という授業の総合的評価に関する項目が学生による評価では他に比べて低い満足度となつています。「授業時間の厳守」や「声の聞き取り易さ」とした授業に対する基本項目の評価だけが高くても授業の満足度は改善せず、「いろいろな手段や工夫」「学生の反応を確かめながら」とした教員の積極的な行動により、さらなる授業改善の必要があるようです。また、教員側では取り組んでいるとの高い意識であった、声が明瞭である「

「いろいろな手段・工夫」「学生の反応を確認している」とした設問で、学生と教員の評価のポイント差が大きく目立った点が

特徴的でした。しかし、秋学期になると図2に示すように学生による評価がやや高くなる一方、教員の自己評価は秋学期ではやや厳しい自己評価となり、学生の皆さんと教員の授業の評価のギャップが小さく、また傾向が見られます。これは、教員が「魅力ある授業づくり」を意識したこと、2008年度から学生の自由記述に対して教員がどのような対処したかをフィードバックさせる自由記述に対するコメントを導入してきたことで、授業が一方通行でなくなったことにも起因し、徐々に「魅力ある授業づくり」が浸透してきていると考えられます。

授業評価の直接的な設問と意味が異なりますが、「学習時間外の取り組み」や「積極的な学習態度」の設問についてみると、教員は学生の皆さんが思っている以上に期待を持っているようです。こうした点も、魅力ある授業づくりが両者の差を小さく、かつ評価ポイントが高くなる手助けとなることを期待したいと思います。

(大学教育研究センター)

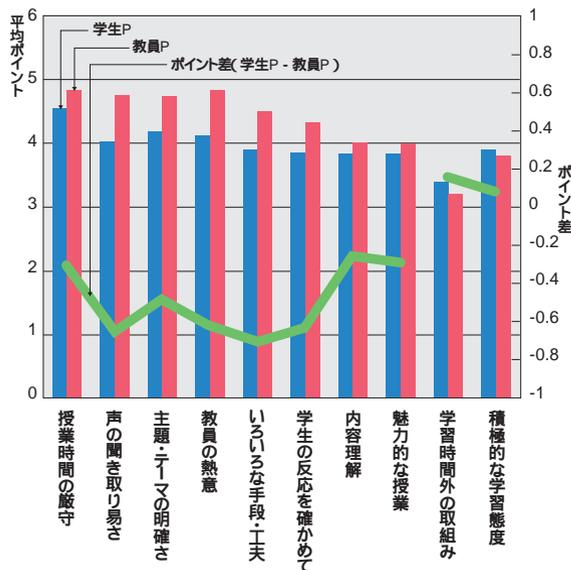


図1 2008年度春学期授業評価ポイント

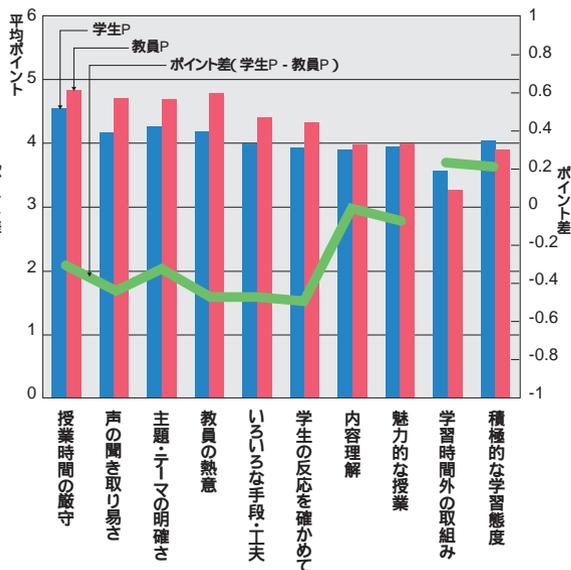


図2 2008年度秋学期授業評価ポイント